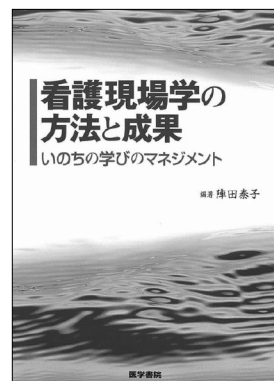


『看護現場学の方法と成果 いのちの学びのマネジメント』

看護学独自の科学を 探究する看護教員への 問いかけ

編著：陣田泰子／定価：2,520 円(本体 2,400 円+税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



「看護現場学」という言葉に、心を動かされない人はいないだろう。私たちが看護を語るときに欠かせない、刹那的で永遠的な人や出来事との関わりを生み出す母胎からの看護現場学なのである。私たち看護教員は、学問としての看護学の教授を目指しながらも、独自の方法論を持ち得ないことから足元の揺らぎを自覚している。その方法論について、著者は自身の来歴に重ね合わせるように追究し続けている。1995年に、看護短期大学の教員になり、「26年という看護師のキャリアは、教員をするうえでそれなりの意味があるもの」と考えていた著者が、しかし他教員と共同作業を行っていく中で、自分が何か「一步遅れる感覚」を覚えるようになる。それは他教員と著者との看護学に対する立場の相違——前者は演繹的に、後者は帰納的に看護を捉えていくアプローチの相違であった。以来、著者は臨床看護を基盤にした看護学とその方法論の確立へと向かうことになる。

著者が、その看護経験を言語・概念化していく帰納法から「私の看護のこだわり」が明らかになり、さらに「私の看護観」へと連繋することで、時間的な概念をもとにした「私の実践論」へと導かれていく。その鍵となるのは、「ナレッジ交換会」という看護実践の共有にあった。すでに身体化してしまっている看護実践を、自ら覚知することは難しい。だからこそ同僚のまなざし・鑑識眼こそが、

看護の知を顕わにする契機となる。例えば「急変を見逃さないコツ」など、思わず頷きながらその内容を辿ることができる。しかし、看護の知として確認するためには、それを生み出すコンテクストを掘り下げ、看護師の思いに迫り、さらに実践に生かせる知であることを確認していくという根気強さを要する。その知とは、古典的学習による表象的な個人の中にある知とは異なり、実践共同体という共感的な場で編み出され、形式知と経験知の融合と接離にこそ垣間見る。それは幾つもの事例を通して実感できる。事例に生きられる数々の看護師、病む人、その家族へと思いを馳せるとき、読み手の気持ちをも動かされていくのは、浮き彫りになっていく看護の知への了解というつながりなのかもしれない。著者が看護学に対する弛まず揺るぎない志向性と、固定化されない柔軟性を維持できるのは臨床看護にこだわる実践者であり、研究者でもあることの実証であろう。

翻り、私たち看護教員はアクチュアルな看護を重視しながらも、学内では臨床看護の臨場感を伝えるには限界があることを、どこかで当たり前にはしていないだろうか。看護学独自の科学を探究するのは看護教員の課題であることを、著者はあらゆる形で問いかけてくる。私たちはどのように応答していくのか、そのヒントも隠されている書である。